



**AEFA** アジア教育友好協会  
Asian Education and Friendship Association

# フレンド会報 臨時号

〒102-0074  
東京都千代田区九段南2-3-22  
アーバンセカンドビル3F  
TEL:03-6265-6490  
FAX:03-6265-6491

2020年10月20日 発行

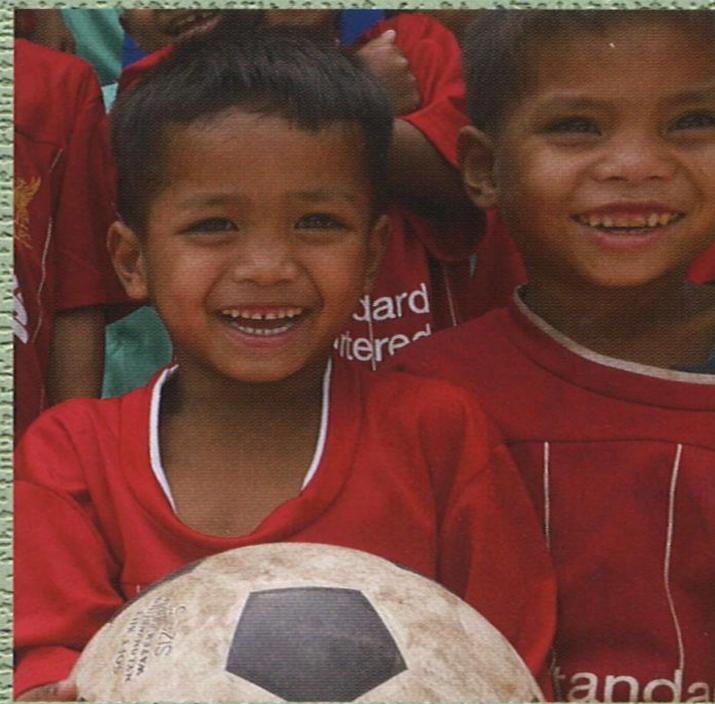
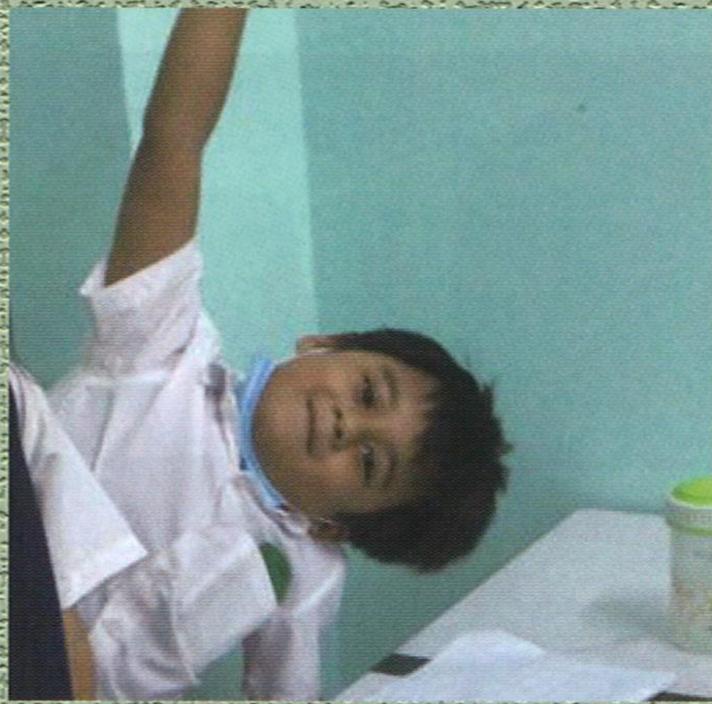


AEFAの3層構造理念

## 未来へ向かう、 東南アジア教育支援の変化

巻頭対談 谷川洋×田中富美子

多彩なAEFAのプロジェクト  
子どもの権利プログラム@ラオス  
科学技術教育@ベトナム  
読書習慣啓蒙活動@ベトナム  
奨学金@ラオス  
難民学校支援@マレーシア  
「AEFAでこれをやりたい!」  
各国のパートナー



現地のパワーと会員の意志がAEFAの次のページを開く

# 東南アジア教育支援の変化

## 未来へ向かう、

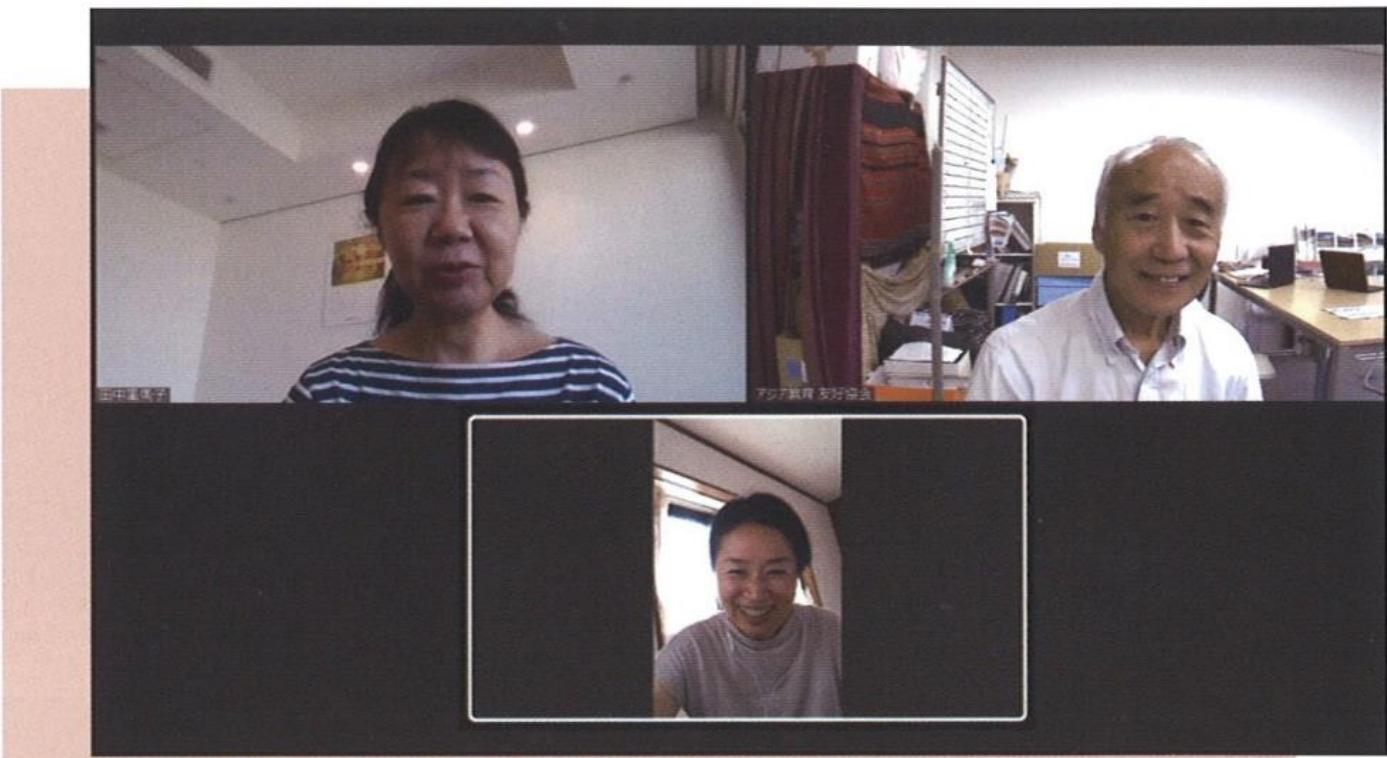
### talk session

AEFA 理事長 AEFA 顧問

谷川 洋 × 田中 富美子

ベトナム、ラオス、タイ、スリランカにおいて少数民族のための学校建設を進めてきたAEFA。設立15年目にあたる2019年にはAEFA支援により建設された学校が300校に達しました。また、近年のAEFAの支援は学校建設に留まらず、人権保護、農業支援、環境プロジェクトなど、新しい形へと広がりを見せていました。その背景には、支援を進めるにつれ新たに直面するさまざまな問題がありました。コロナ禍によりこれらの問題が顕在化し、現地ニーズの変化・多様化が加速する今、AEFAはその動きをどう捉え、どのような次の一步を踏み出そうとしているのか。谷川理事長と田中顧問にお話を伺いました。

聞き手：鈴木 雅子(AEFAボランティア)



2020年9月、事務所と自宅をオンラインでつないで対談を実施

#### 現地の変化とともに走り続ける、教育支援の道

——AEFAの支援により東南アジアで建設された学校が300校に達したと伺いました。近年は人権保護や農業支援など、これまでとは異なるタイプのプロジェクトに支援の手をひろげていらっしゃいます。この変化の背景は、現地における学校建設のニーズが充足されつつあるということでしょうか。

**谷川** AEFAが新しいタイプのプロジェクトを展開しているのは、現地の状況と支援ニーズが変化・多様化しており、それに柔軟に対応しているからです。たしかに、学校建設のニーズが充足された地域もあります。たとえばタイのチェンマイ地域では、長年にわたり学校建設を進めてきた結果、中高等教育も含めて同地域の学校建設のニーズは充足してきました。ところが、学校を卒業した若者が都会に出ても都会の生活になじめず、村に戻っても従来の村の農業では十分な生計を得られない、という問題があることがわかってきました。学校を作った、教育環境を

整えた、しかしその先の未来を描くことができない、ということです。このように、一歩支援を進めれば更にその先の課題が見えてくる。その課題に対峙する中で、新しいタイプの支援プロジェクトが生まれています。AEFAが現地の変化とともに前進し続けていることの証とも言えるでしょう。

**田中** タイの新たな課題に対して始めたのが農業支援プロジェクトです。村に戻ってきた若者が教育を活かしつつ地元の農村で生活できるように、農業ネットワークづくりや販売の仕組みづくりを支援しています。なぜAEFAが農業を?と思われるかもしれません、「教育の先に明るい未来がある」と示すことで教育の持続性を支えるという重要な目的があります。

——教育とは関わりがなさそうに思える活動も、実はつながっているのですね。AEFAが教育支援を長期的に考え、かつ、現地のニーズに合わせた最適な支援を目指していることが理解できました。タイ以外の地域ではどのような状況でしょ



山奥の小学校の校長先生宅で昼食をごちそうになる（ベトナム北部）



奨学生たち、教員養成短大の教室にて（ラオス）

うか。

**田中** 私の担当するベトナムでは、この三年間にニーズが大きく変わりました。ベトナム中部・南部では学校建設のニーズが充足しており、建設が必要な地域はベトナム北部へとシフトしています。その北部でも、生活レベルが向上しつつある平地からより困難な山岳地帯へとシフトしています。

**谷川** スリランカでは学校の教室不足を解消することはできました。しかし、政府からの予算がつかないため古い校舎の修繕ができないのですよ。子どもたちは壊れかけた危険な校舎で勉強している。そこで、AEFAではいくつかの学校を対象に「徹底修繕」プロジェクトを立ち上げています。それからラオスの重点支援地域であるサラワン県では、初等教育がようやく当たり前となり、AEFAの学校建設支援は小中高一貫校など高等教育の学校づくりへと徐々にシフトしています。

**田中** 建設支援が必要な地域・レベル・内容が各国で変化していますよね。それと同時に、教室や学校の設備といった“物”の支援ではない、“人”や“仕組み”への支援、いわゆるソフト支援へのニーズも各地で増えてきていると感じます。

### 加速する、ソフト支援への動き

——ソフト支援というと、先ほど説明くださったタイの農業支援もそのひとつですね。

**田中** ベトナムでは、学校を中心としたソフト支援が充実してきました。会報28号で紹介したレインボーライブラリー（子どもの読書習慣の啓蒙活動 →P7）プロジェクトのほか、スポーツを通じて子どものリーダーシップを育成するサッカーチーム作りのプロジェクトなど、新しい取組みが次々と生まれています。

**谷川** ラオスでも、子どもの人権や教育を受ける権利の保護、教師の養成など、“人”を中心としたソフト支援のニーズが高まっています。そのひとつがCRP（Child Rights Promotion）とよばれる子どもの権利プログラム（→P6）です。少数民族の子どもも

たちは人がまばらなところで暮らしているから、急に学校のような集団社会に入るととまどいがあるし萎縮しがち。それが躊躇となってドロップアウトあるいは落第にもつながりかねない。そこで、学校に通っているお兄ちゃん、お姉ちゃんが先生役となって、幼い子どもたちに学校で必要なマナーを教える。子どものリーダーシップを引き出すと同時に、幼い子どもたちの就学後の躊躇を無くして教育を継続して受けられるようにしようというわけ。

**田中** ラオスでは高等教育に進学した生徒への奨学金（→P8）支援も行っていますよね。

**谷川** 地域の若者を対象に職業訓練校などの奨学金支援も行っています。タイの農業支援と同じ狙いだね。中でも教師養成奨学金は、少数民族の子どもたちが自分の民族の言葉を話せる先生から授業を受けられるというメリットにもつながる。子どもたちの言葉のハンディキャップを勉強のハンディキャップにさせず、地域の頼れる人材に育つように、そして、地元に戻ったときも活躍できるように、と考えています。

**田中** 言語、習慣、環境など、少数民族の教育の安定・継続・向上においてリスクとなる要因には以前から着目して、これらのプログラムを進めてきましたが、今やコロナ禍によりさまざまなりスクが実際の問題として加速度的に顕在化しています。コロナ禍が生んだ経済的問題や人々の精神的ストレスが、弱い立場のものへと向かい、少数民族の生活基盤や教育を受ける権利を脅かしています。これまで以上に支援が急がれる状況です。

### “梓”を取り去って “ワクワク”を

——学校づくりひとつをとってもニーズが変化しており、加えて、多様なソフト支援も求められていることがよくわかりました。しかし、コロナ禍で支援が急務とはいえ、現地に赴くことができない今、各地各様のニーズに応えて活動を進めるのは難しいのではないかでしょうか。

**田中** AEFAの強みの一つは、信頼できる現地NGOとの協力



若手農家の新たな取り組み（タイ）

体制が確立されていることだと思います。ベトナム、ラオス、タイ、スリランカ各国のパートナーが、AEFAとの緊密なやりとりを続けながら、現地の状況を見極め、プロジェクトを進めています。

**谷川** 開校式のようなイベントこそ延期されているものの、コロナ禍で現地に行けないという理由で中止となったプロジェクトはひとつもありません。現地の人々を助けたいというNGOの熱意はむしろ強まっていると感じます。

**田中** 一方で、AEFAとの長年の協力関係があるからこそ、現地NGOが“AEFAパターン”にはめて考えてしまうという問題もないわけではありません。現地NGOのスタッフは“こういうことをやりたい”と話してくれるものの支援要請としては出てこない。AEFAの意向を気にしている。

**谷川** 僕は、自由にやっていいよと言つとるんだけどなあ。

**田中** そこはやはり、彼ら彼らの理事長への信頼が作用するのだと思うのです。理事長の考えを大事にしたいと思うあまり、理事長が何か言えばそれで決まり、してしまう。今後は私たちAEFAの誰もが、現地NGOの“本音”を引き出すよう努力する必要があると思います。きっと、ワクワクするような新しいプロジェクトがもっと生まれると思うのです。

## 現地の推進力を、日本から後押し

**谷川** その点、ベトナムでは変化が始まっていると思う。**STEMプロジェクト**（→P7）のようにね。

**田中** STEM(Science, Technology, Engineering, Mathematics)プロジェクトは、科学技術に触れる機会の少ない農村や山岳地域の子どもたちに、身近な素材で科学技術の意義を知つてもらい、将来の夢を育てることを目指す取組みです。このプロジェクトは現地NGOによる提案から始まったものです。AEFAに対して現地NGOからこういった分野での支援要望が示されたのは初めてのことです。

**谷川** 他の地域でもNGOによる新しい発想、新しいチャレンジに期待したいね。また、国や地域をまたいだNGO同士の横のつ



サッカーチーム作りのプロジェクト（ベトナム）

ながらもサポートしたい。各国のNGOが互いに学び合う場をつくるとか。例えば、ラオスのNGOやベトナムのNGOにタイの農業プロジェクトの現場を見てもらうことを考えています。

**田中** いま各国のNGOの動きを見ていると、共振するかのように、未知の分野に向かって波を作り始めているように思います。現地NGOの力が更に大きな推進力へと生まれ変わる、その胎動のようなものを感じており、そういった動きの後押しをすることもAEFAの重要な仕事だと思います。

## AEFA会員の一人一人が支える未来

——お話を伺って私もワクワクしてきました。ところで、私はボランティアとしてAEFAの広報活動に参加し、支援の一助となる実感を得ることができました。ドナー企業の方々も支援の実感を得やすいと思います。しかし会員の皆様は、そういった実感がやや薄いのではないでしょうか。

**谷川** 実は、新しいタイプの支援プロジェクトの多くを支えているのは会員会費なのですよ。新しいプロジェクトは軌道もできていないし実績もありません。そこで、地域のために必要と判断した新しいプロジェクトをパイロットプログラムとしてAEFAの会員会費で実施し、実績を作ることを目指しています。ベトナムのSTEMがその例です。また、緊急性が高くすぐにも助けが必要な場合、会員会費で支援する場合があります。最近の例では、コロナ禍で支援が途絶えて学校が閉校の危機にあった、**チン族の難民の子どもたちのために支援**（→P9）を行いました。

**田中** 支援の継続のために会員会費をあてる場合もあります。たとえばラオスの奨学金がそうです。奨学金は1回で終わりではなく複数年にわたって継続して必要で、ドナーの有無によって支給が左右されなければならないものですから、必要に応じて会員会費で支援しています。

**谷川** このように、会員のみなさま一人一人が、会費を通じて、現地の子どもたちの教育環境や教育を受ける権利を守ってくださっています。来年度は、スリランカの徹底修繕プロジェクトも会

員会費で実施する計画です。こういった情報をもっと会員の皆さんに分かりやすくお伝えしていきたいと思います。

——会費以外の方法でAEFAの活動を支援したいとお考えの方もいらっしゃるかもしれません。たとえば、ビジネスや人生で多くの経験を積まれている会員の中には、AEFAのためにその経験を活かしたいと思う方がいらっしゃるのではないかでしょうか。

**谷川** 実際に、「海外との業務経験を活かしてAEFAのプロジェクト運営に関わってみたい」、「自分の持つ知識をプロジェクトに活かしたい」などの声をいただいている。

**田中** 個人の例ではないのですが、ドナー企業の提案と専門知識により生まれたプログラムがあります。ベトナムのオーガニックガーデンプロジェクトです。校舎や設備の建設に加えて、学校の敷地内にオーガニックガーデンを作るというもので、先生と生徒の家族が安全で美味しい野菜を育て、収穫した野菜は生徒、先生、貧しい生活を送る生徒の家族に提供されます。生活の質の向上を教育の安定につなげ、環境にやさしい農業も広めていくという狙いです。このプロジェクトは、ドナーからの提案と現地の希望が合致して実現したという点や、ドナー企業がもつ専門知識が活かされているという点で、ひとつの参考モ

デルと言えるのではないでしょうか。

**谷川** 会員個人の知恵と思いを託したプロジェクトが現地ニーズと合致して実現する、そんなモデルが生まれるかもしれません。そのための仕組みづくりや、会員を生かした支援についてのアイデアについても、会員のみなさまの知識と経験に助けていただけるのではないかと期待しています。

**田中** 昨年度は「会員の集い」のプログラムとして、会員が活動成果を発表、また、会員同士でAEFAの活動の次のステージについて話し合う場を設けました。こういった試みは今後も続けていく価値があると思います。しかし今はコロナ禍で、人が集まる会員の集いの開催は難しくなっていますので、アンケートなどを通じて皆様のお声を伺いたいと考えています。

**谷川** 学校建設に始まったAEFAの教育支援に、次々と新しいプロジェクトが加わり、現地NGOのパワーも加わって、大きなエネルギーとなっています。会員の皆さんにも、未来を創る実感を得ていただきたいと思います。

——その未来は、教育の継続、継続的な教育がもたらす地域の安定、地域の安定が可能にする教育の向上、という「持続の輪」がつながった未来ですね。AEFAの今後の方向についてお聞かせください、ありがとうございました。

## 多彩な展開中のプロジェクト

### ●ソフト支援(地域)

#### ソフト支援

- ・就学前教育支援・子供を暴力から守る啓蒙活動
- ・環境啓蒙活動
- ・遠足
- ・教員研修会  
(先生方のクロスピジット)
- ・農業プロジェクト  
(若者農家ネットワーク)
- ・学校運営費用  
(用途は限定せず)

### ●ソフト支援(学校)

#### 学校建設

- ・学校
- ・井戸(浄水装置を含む)
- ・寮(学生寮)
- ・寮(教師寮)
- ・スポーツコート・村の集会所
- ・大規模修繕
- ・フォローアップとしての小規模修繕

### ●奨学金

#### 奨学金

- ・小学生
- ・高等教育(大学、職業訓練校)
- ・教師養成コース(教員養成短大)

#### 教員の給与支援

無給で働くボランティア先生の給与支援

#### 建設+ソフト支援

- ・図書室+図書+読書習慣啓蒙教育(1年間)
- ・サッカーコート+サッカーチーム育成(1年間)
- ・実験室ハウス+科学技術教育支援(1年間)

# 子どもの権利プログラム@ラオス

CRP

Child Rights Promotion

ラオスのパートナーNGOであるACDは、その活動の中心に「子どもの人権」をおいています。

プログラムのエッセンスは、子どもが主体者となること。ACD代表のハンさんの、「子どものための支援活動は多々あるが、実際に参加しているのは大人ばかり。子どもの為の活動は子どもが主役であるべき」という考え方から生まれた活動です。

就学前教育(幼稚園や保育園)の機会が無い少数民族の村では、幼児はほとんどの時間を田畠で家族と過ごしています。そんな幼児のために、同じ村の高学年児童が「お兄ちゃん・お姉ちゃん先生」となって実施するプログラムがあります。活動の場は小学校、先生方や大人はあくまで見守り役です。

幼児たちは、自分たちが使っている村の言葉とは違う共通言語の「ラオス語」に触れたり、手洗いや歯磨きを学んだり。家族以外の人と接することによって社会性を身に付けることができ、また「学校は楽しいところ」と認識するようになります。

先生役の児童のほうでも、普段は消極的に授業中に質問できなかつたり意見を述べられなかつたりした児童がこの活動を通して自信を持ち、リーダーシップをとれるようになるなどの変化が見られています。また、家庭からも「子どもが礼儀正しくなった」「色々な新しいことを子どもから教えてもらっている」「子どもが学校のことをよく話すようになった」などの声があり、子どもたちの変化を目の当たりにした村人たちが「やはり教育は大事なことだ」と再認識、「子どもたちの教育のために」と更なる行動を起こす動きにつながっています。その一例がサラワン郡パヌアン村で、保護者が教育スポーツ局へ陳情して村に幼稚園ができ、現在はAEFAプロジェクトで小学校の建設が進行中です。



上級生から、手の洗い方を学ぶ。  
左) 水道のない地域はバケツの水で、  
右) 水道がある地域では実地練習。



CRPの活動はこれにとどまりません。ラオスでは、近年の経済発展に伴い山奥にも多くの人・モノが入ってくるようになりました。それにともなって、搾取や性被害、薬害等が大きな課題となっています。子どもに対する暴力(虐待、搾取、性被害、ネグレクト)から、子どもたちが自分で自分の身を守り、学校・地域が子どもを守るための活動が始まっています。

10年ほど前まではラオスの山間部地域には中高校が無く、また少数民族の因習で女子は早婚が多く、出産時の死亡も珍しくありませんでした。女子も学業を継続することができれば、婚姻と出産年齢も高くなり、知識をもつことで家庭教育にも寄与することができます。

全ての活動は、子どもの人権をベースに、これからを生きこれからとの世界をつくるひとりひとりの、生きる力や可能性をひらくものです。急速に変化していく現場のリアルな声に耳をかたむけ、コミュニケーションを重ね、主役である子どもたちの歩みを、AEFAはパートナーとして寄り添い、支えていきたいと思います。

(事務局スタッフ 金子 恵美)



お兄ちゃん・お姉ちゃん先生たち



おゆうぎ中

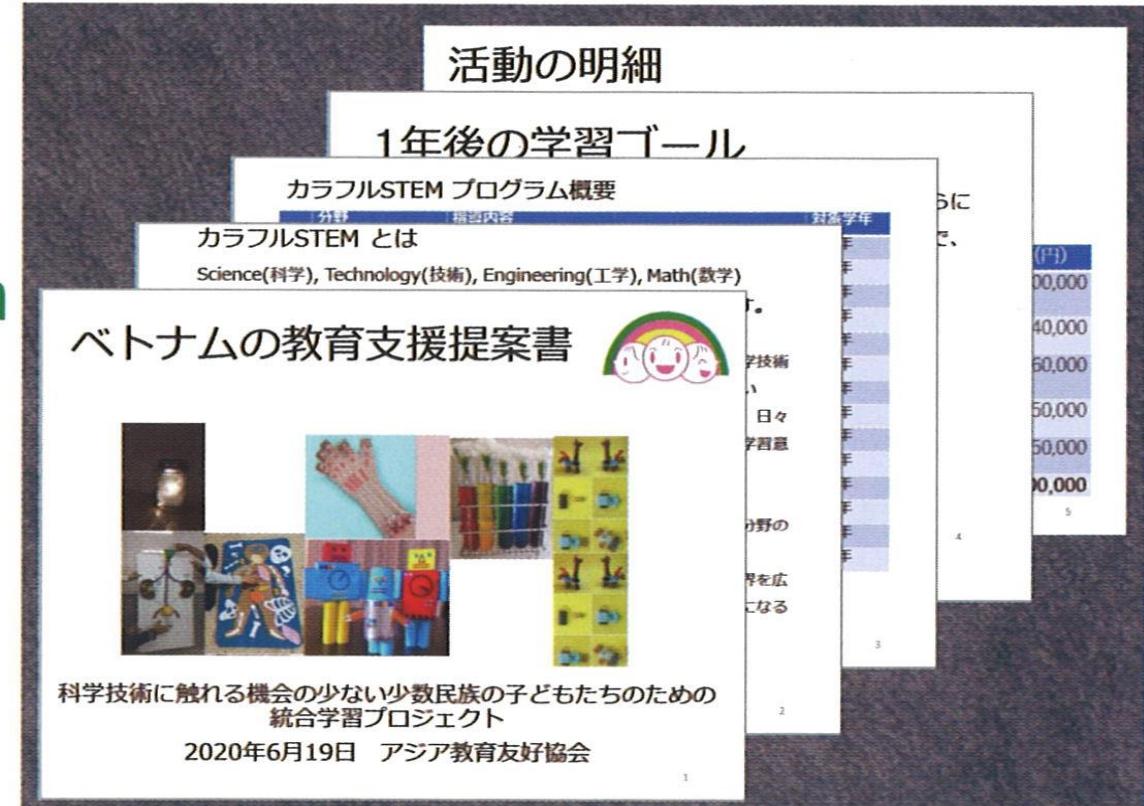
# 科学技術教育@ベトナム STEMプロジェクト

## Science, Technology, Engineering, Math

ベトナムでは、現地NGOのCSD発の、科学技術教育のプロジェクトに挑戦しています。プロジェクトの名前は、カラフルSTEM。STEMはScience(科学), Technology(技術), Engineering(工学), Math(数学)の頭文字で、この4分野を統合的に学習する教育支援活動です。

農村部や山岳地域に住む少数民族の子どもたちは、主に人力や水牛などを使って行う農業や家畜の飼育が主な産業である村の生活で、科学技術を知る機会はありません。そのため、科学技術への興味や学習意欲が乏しい傾向があります。加えて、農村部や山岳地域の小学校では、子どもたちが、科学技術を学ぶことに意欲を持てるような学習指導が、十分に行われていません。

	分野	指導内容	対象学年
1	自然	天体について（太陽系の星やその動き）	4-5年
2		気象について（4つの季節がある理由）	3-5年
3		ビンの中で雨を降らせる実験	2-3年
4		人体の消化と排泄の仕組み	3-5年
5	健康	呼吸と肺の仕組み	1-3年
6		人体の構造について（骨、筋肉、内臓）	1-5年
7	化学	化学反応の実験	2-5年
8		白い花をいろいろな色に変える実験	1-3年
9		手に入り易い材料を使い車を作って走らせる	3-5年
10	ロボット	手のロボットづくり（指を動かす仕組み）	1-3年
11		ロボットづくり	2-4年
12	数学	ボードを使った算数の授業	1-2年
13		数字の木を作り足し算を学ぶ	1-2年
14		時計を作り時間について学ぶ	1-2年



STEMプロジェクトのプロポーザル

そんな子どもたちの世界を科学技術の分野まで広げるために、プロジェクトでは、以下を目指して1年間の活動を行います。

●ベトナム農村部の小学校教員が、新たな教授法を身につけ、子どもたちに科学技術分野の学習の面白さを伝えられるようになる

●子どもたちが、身近な生活の中で、楽しみながら自然科学や技術を学び、視野を広げ将来の夢を育む中で科学技術系の進路への興味と学習意欲を持つようになる

1年後の学習ゴールとしては、日常生活と科学技術が密接に関係していることを知り、さらに実験や制作活動を通じて科学技術を意識的に体験して、科学技術をベースとした発想力・判断力・問題解決力を子どもたちが身につけることを目指します。

まずはAEFA支援校のバクザン省カオロイ小学校での実施に向けて契約を締結しました。実験棟の建設と設備・備品の準備を経て、2020年12月からの1年間が活動期間という息の長いプロジェクトです。

(顧問 田中 富美子)

# 読書習慣啓蒙活動@ベトナム レインボーライブライリー

レインボーライブライリーが7色に広がっています。

会報28号の巻頭でご報告したベトナムでの読書習慣啓蒙活動支援「レインボーライブライリー」は、第1号の支援先のトゥエンクアン省のキエンティエット小学校での1年間の活動を昨年12月に終了。その後、同省のスアンバン小学校、ティエンボ小学校の2校での活動が決まり、図書室の建設や図書・設備の準備が進んでいます。さらに、4校での活動への支援がほぼ決定、2021年には活動が7校に広がります。



完成間近のスアンバン小のレインボーライブライリー

# 奨学生@ラオス 教員養成・高等教育支援

ラオスの山岳地帯の少数民族地域では、街から赴任する低地ラオ族(ラオス人口の7割)の教員が、少数民族の言葉を話せなかったり、村の風習や生活を知らなかったりするため、村の子どもたちが授業内容を充分に理解できないという問題を抱えています。そこでAEFAでは少数民族出身の教員を増やすことを目的に、2010-2011年度より奨学生プロジェクトを始めました。このプロジェクトにより、パチュドンなど山岳地帯の中学校(前期中等教育課程)を修了した生徒が、サラワン県教員養成短大の少数民族生徒のための短期教員養成課程(4年間)で教員資格を取得しました。

ところが、教員養成課程進学の条件が高校修了に引きあげられ、新規教員採用数も減少。ラオスでは免許取得後に数年間のボランティア勤務を経てようやく本採用となるのですが、その枠に入ることも難しく、せっかく教員免許を取得しても教職につくことができないケースもできました。公務員や教員になれないなら高等教育を受ける意味がないと、子どもたちや保護者のモチベーション低下は深刻でした。

そこで、2013-2014年度から、職業訓練校と高等教育にも奨学生の対象を広げました。奨学生のなかには、国内に4つしかない国立大学の1つであるチャンパサック大学、ベトナムの大学に留学している生徒もいます。

これまでの10年間で、支援した奨学生は合計51人。教員養成短大修了者31人のうち、教職についたのは18人(7人は公務員、11人はボランティア先生)。このプロジェクトのパートナーであるACD(現地NGO)のスタッフになった奨学生もいます。そのほか、郡役場のボランティア職員・商店の店員・バイク修理店起業・バナナプランテーション勤務・キャッサバ栽培等、若者たちはそ



郷里の小学校で教える元奨学生のモム君

れぞれの道を歩んでいます。今年度の新規奨学生は4名で、男子3名は教員養成短大、女子1名は南部財政大学で学んでいます。

ACD代表のハンさんは「教師や公務員や“何かになること”が人生の成功、ではない。どんな仕事に就いても、自分で商売を始めるでも、農業なら他の人とは違う作物をつくる・加工食品をつくる等、自分の人生を自分で選択し、工夫してきりひらいていく。生きる能力を若者につけさせたい」と、新たにコーチングのプログラムを実施しています。日々変貌するラオスでは、子どもたちを取り巻く環境の変化のスピードは早く、プログラムも常に更新が必要です。

奨学生プロジェクトを始める前に現地NGOスタッフに言われた「人は、そんなにすぐには変わらないよ。」という一言が今でも忘れられません。現地から離れて日本にいる私たちはつい、結果を出すことを急ぎがちですが、そんな時に、“人を育て、教育や環境を整えていくのには長い時間がかかる”ということ思い出させてくれる言葉です。常に現地の人々に寄り添っているNGOと心をともにして支援を継続していきたいと思います。

(事務局スタッフ 金子 恵美)

## 奨学生から

### プーク君

教員養成短大終了→ACDスタッフ



奨学生に選ばれたことはとても大きな機会であり、誇りです。僕の未来は、全く新たに開かれました。AEFAプロジェクトで育った僕が、今は、奨学生を励ましたり支える立場です。これからも、ACDの一員としてAEFAのみなさんと共に、ラオスを発展させるため、子どものための活動に邁進します。

### ホーン君

職業訓練校修了→大工

木造と鉄筋コンクリートの建築を学びました。今は主に、ACDと学校建設プロジェクトや、村人から頼まれた工事で家族を食べさせることができます。これからも、自分の得た技能と知識を、家族と故郷のコミュニティの為に役立てたい。ずっとACDが僕を支援してくれたので、自分ができることは何でも手伝いたいです。



### エウ君

教員養成短大在学中

僕は勉強が好きで、クラスや村のみんなに、ぼくの考えやアイディア、経験をシェアすることをとても誇りに思ってきました。これからも勉強を続け、また人として成長したいです。



※エウ君はパチュドン高校出身。化学でサラワン県で2位の優秀な成績を修めました。理科教員を目指しています。

# 緊急支援@マレーシア チン族難民の学校支援

ミャンマー出身の山岳少数民族

マレーシアには、近隣諸国からの難民や庇護申請者が17万人以上います。10万人を超えるロヒンギヤ難民に次いで多いのが、ミャンマー北西部チニ族の山岳地帯から国軍による弾圧や武力衝突を逃れてきたチニ族難民で、その数は2万人以上。マレーシアは難民の受け入れを公式には認めておらず、難民の人権を守る国際条約(難民条約)を批准していないため、難民は定住できず、正規雇用や義務教育も認められていません。唯一の後ろ盾は国連(UNHCR)です。彼らの多くは第三国での定住を望んでいますが、現実には、不安定な境遇のままマレーシアで長い年月を過ごすことになります。難民キャンプは無く、同族の仲間たち、NPO、ボランティアなどの協力を頼りに、助け合いながら暮らしています。難民が自主運営する学校もありますが、特定の支援母体があるケースはあまり見られません。

Chin Student Organization (CSO)は、チニ族難民の若者たちが運営する学校です。教室はマレーシアの首都クアラルンプール郊外の小さな雑居ビルの2階。ここは、かつて私がマレーシア在住時にボランティア活動をしていた学校でもあります。

この春、コロナ禍で都市封鎖されたクアラルンプールから「子供たちの食べるものが無い」という緊迫したメッセージを受け取りました。非正規雇用の生徒の親たちは真っ先に職を失ってし



昼食前のお祈りをするCSOの子どもたち

まい、困り果て、休校中にもかかわらず、21歳の若い校長に助けを求めていました。地域の難民コミュニティから、どれだけ学校が頼りにされていたかがわかります。

CSOの窮状を知ったAEFA有志やボランティア仲間の連携により寄付金が集められ、ただちに緊急支援が行われました。CSOの先生たちは寄付金が届くとすぐに食料調達に駆け回り、外出禁止令下での危険もかりみず各家庭に食料を届けました。

しかし、その後「学校を再開できない、閉校も考えている」との続報が入りました。収入が無いままの保護者も多く、また、新型コロナの影響で、それまで学校運営を支えていた現地NPOや個人からの援助が激減したのです。このため、教室の賃料を支払い続けることすら厳しい状況に立たされました。

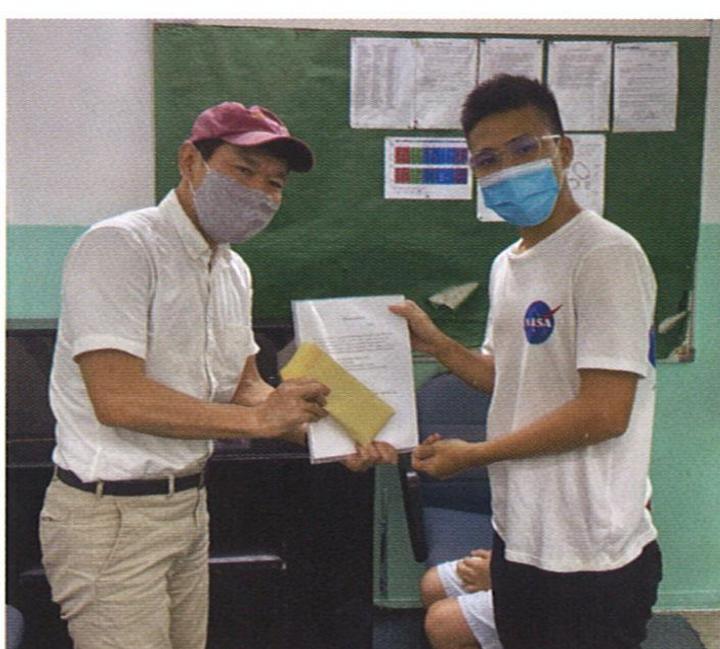
子供たちの学びと安全を守る場が失われつつあるという緊急性、学校という場に必要な継続性。この困難な状況を、“ご縁”の

あるAEFAとしても看過できないと考え、継続的な支援を開始しました。7月、現地在住のAEFAパートナー石崎浩之さんがジョン校長に手渡した封筒には、ひと月分の学校運営補助金3000RM(約8万円=1か月分の教室賃料に相当)が入っていました。まずは1年間、毎月補助金を届けながらCSOを見守っていきます。

CSOの若い先生方は、自分自身の将来図すら描けない状況のなかでも、いつも子供たちに「夢や目標を持って」と教えています。「私たちには何もお返しできるものはありませんが、皆さんのおかげで子供たちは今日も勉強を続けられます。この子たちが目標を持ち、未来に向かって成長していくよう、希望の『種まき』をしてください本当にありがとうございます。」

こう話すジョン校長も13歳で故郷を離れ、CSOで勉強しながら育った若者の一人です。

(事務局スタッフ 服部 駒子)



左上) 石崎さんとジョン校長、 右上) お礼の歌動画より

左下) 朝の検温。体温計やマスクもAEFA支援、 右下) 8月、待望の授業再開

新型コロナに翻弄された今年。現地視察にも開校式にも行くことができず、各国パートナーとの打合せもすべてオンライン。AEFAの活動は、これまでとは違う進め方を余儀なくされました。この事態は、設立以来、走りながら考える、で駆け抜けてきた

私たちにとっては、一旦立ち止まり、この状況下で何ができるのか、何をしていくのか考える機会にもなりました。それを整理するためにと、会報臨時号発行を企画。改めて、自分たちに聞いかけました。

## \*\*\*\*\* 理事・顧問・事務局、これからのAEFAを語る

1.現地NGOの自立支援(資金調達も含め)  
いざれは自分の国の中でも資金の一部を  
調達出来るようにならなければなりませんので、  
そのためにAEFAの経験に基づいたコン  
サルティングをしてあげたらよいと思います。  
長期的な課題です。

2.ハード(建物)支援からソフト(人材育成、  
教材開発など)支援へ

3.外から内へ(日本の子ども達への支援)  
Youtubeを使った教材作りとHPへの掲載  
オンライン授業による出前授業の効率化

石塚 勝巳(顧問)

後継者不足で、頭を悩ませる日本の農業法人。そして、ベトナムで見た、木製の農作業道具や、車道でもみの天日干しをする風景。これらから、インバウンドで農業研修生(技能実習生)を考えたい。

青木 信益(顧問)



ガハイ分校の昼休み(ベトナム)

1 AEFAが作った学校から、何名かを1週間ほど、日本に招き、ホームステイしながら日本の学校の授業を受ける。子どもの頃に体験したことは深く残るので、それを直後に自分の学校で発表したり、将来に生かしたりする。未来の教員の育成につながる可能性もある。

2 AEFAが作った学校に日本の子どもを招待し、一緒に授業を受けたり、生活を共にしたりする。

3 日本の教員にAEFAの作った学校で授業をさせる。事前に実態把握など、準備が必要であるが教育技術交流につながる。

4 菊地先生や私などが、日本紹介の出前授業をAEFA設立学校で行う。テーマは「発展することの怖さと自国の良さ」

5 AEFAで日本語学校を日本に設立する。

今後、技能実習生等で来日する外国人が益々増えることが予想される。AEFAで設立した学校で育った学生が日本で働きたいと考えることも多くあるかもしれない。自分の家族を救うために来日したはずなのに、悲惨な状態に陥る方も少なくない。

榎 尚信(顧問)

いつか、AEFAプロジェクトに参加してくれた  
子どもやスタッフ同士が現地訪問/招聘等  
で交流したいです。

あの時・あの事、がお互い、繋がっていること  
が実感できるように…と思うからです。

金子 恵美(事務局)

学校建設の目的は子供達に自立できる大人になってもらうためのファーストステップです。次のステップは国ごとに異なると思いますが、その国で必要とされる技術を習得できる職業訓練学校の建設が必要になってくると思います。

ラオスでは独特の織物が制作されていたと思います。この技術を更に磨いて、日本を皮切りに世界で通用するブランド(高級ではなく日常ブランド)に育てることができればと思います。それが実現できる訓練校(デザイン含む)の建設ができればと思います。

横江 友則(理事)

イエンバイ省の山奥にあるガハイ分校に校舎を建てたいです。  
去年の10月にバイクで1時間山を分け入って、棚田より高い場所にあるガハイ分校を尋ねました。いまでも元気な子どもたちの顔や、粗末で素朴な学校の佇まいが目に浮かびます。

冬は寒いであろう場所なので雨風や寒い気候をしのげる頑丈な校舎を建設したいです。

田中 富美子(顧問)

なかなか現地を直接訪れる機会がない今なので、現地NGOからの発信にとことんとこどん耳を傾けたうえで、「今、本当に必要とされているソフト支援プロジェクト」に資金を使いたいです。

坪井 未来子(理事)

今、気になっているのはタイの農業プロジェクトです。これを成功させたいですね。

溝辺 裕(理事)

—今、AEFAでどんなことを実現したい?

理事・顧問・事務局から、オンラインで届いた声はまさに色とりどりでした。熱い想いの数々を、そのままにお届けします。(敬称略・順不同)



## 私は AEFA で **これ** をやりたい

ラオスやベトナムの現地を訪れて感じるのは、現地の「変化」です。ドナーの皆さん、そして、現地のパートナーの努力、さらには、現地の経済の改善もあって、まだまだ厳しいところも残っていますが、インフラ面での充実は進みました。そうした充実があっても、課題として残るのは、経済の格差が教育の格差に直結していたり、教育の質そのものの改善が現地の課題に追いついていないことを実感しています。ラオスからは、地域の環境の保全、一人ひとりの人権を学ぶ教育、ベトナムからは、数学や理科教育の充実を進めたいと要望が上がってきており、これは、現地の教員たちの再教育も含めてしっかり進めていかねばなりません。日本でも経験したように、経済が活発になれば、環境汚染は進んでしまいますし、目の前のお金を稼ぎたいからと、人の命や人権を粗末に扱うビジネスも横行してしまいます。また、産業が大きくシフトしていく中、少数民族出身の子どもの職業選択の幅が限られてしまっているのも問題です。AEFAは子どもたちの未来の可能性を大きくしていくための取り組みを進める団体です。少し前までは学校を建設し、よい先生に来てもらうことが、第一の課題でしたが、それも少しずつ変化してきています。こうした変化を受けとめ、日本のドナーの皆さんに変化の実情を伝え、ご理解いただき、その気持ちを届ける役割を果たしていかねばなりません。まずは、AEFAのお金を、先行してこうした取り組みに使い、その成果を日本の皆さんに見ていただくことで、変化に対応したより意義の深いおカネの使い方、投資のあり方を見ていただければと思います。

亀井 善太郎(理事)

現地においてリーダーを育てる塾をAEFA支援で3年間行う。又は村のリーダーとなりそうな若者2名位を日本に招待し(無理であればリモート)日本の学校との交流を図り心に火種をつくる事業に取り組む。ややスローガン的ではありますが、Impossible(不可能)からI'm possible(私はできる)に変えていくアップストロフィの役割を、AEFAが果たしたい。

佐川 旭(専務理事)

自己課題で残っているのが、「ベトナムの山のほうに住む子どもたち」の教材化です。「オンライン出前授業」も、トライしてみようと思います。現地のコロナ禍の現状を知らせることでも、日本の子どもたちの「元気」「生きぬく力」に寄与できると信じています。

菊地 修治(顧問)

先生をつくるためのAEFAならではの学校をつくりたいですね。そして、その学校を修了した先生の卵たちが、経済面での不安を感じることなく少数民族の村で教える仕事に就けるような支援ができればと思います。

木村 達也(顧問)

持続可能で安全安心な暮らしを!

<事業>

安全な水や清潔なトイレへのアクセス、教員の安定雇用・給与補償・研修、奨学金、現地と日本の子どもたちがオンラインでも交流。

<スタッフ(AEFA&現地NGO)>

出産、育児、傷病、介護等、人生の様々な局面においても業務を継続可能に。

若手が加わり、事業を次世代に繋いでいく。

田宮 雅子(事務局)

2016年にラオスからテオンさんを招聘、地元 津市の児童生徒と交流した。大変喜ばれたので、ぜひまた実現したいですね。当時テオンさんは16歳、初めて地元を離れたとのことでしたが、高野尾小学校の全校集会ではリーダーシップを発揮して、ラオス舞踊を教えていました。テオンさんの活発さ、自分の意志を表現できること、「海が見てみたい」と周りの大人を引っ張っていき、海岸をのびのびと走り回っていた姿が印象に残っています。

田中 弘(顧問)



交流授業でラオス舞踏指導中のテオンさん

<チン難民の子供たちへの追加支援>と<子供の人権プログラム>

CSO校では学校再開後も通学できない子供たちがいます。月2500円程度の学費やバス代を払う余裕がない、親の教育への理解が足りないなどが原因です。

暮らしが安定するまで学費を免除してあげられるようなサポートができたらと願います。

どの国や地域でも子供の人権が守られ、自分らしく生きる力を身に付けていけるような教育支援プログラムに使いたいです。

服部 駒子(事務局)

# AEFAとともに歩む 各国のパートナー

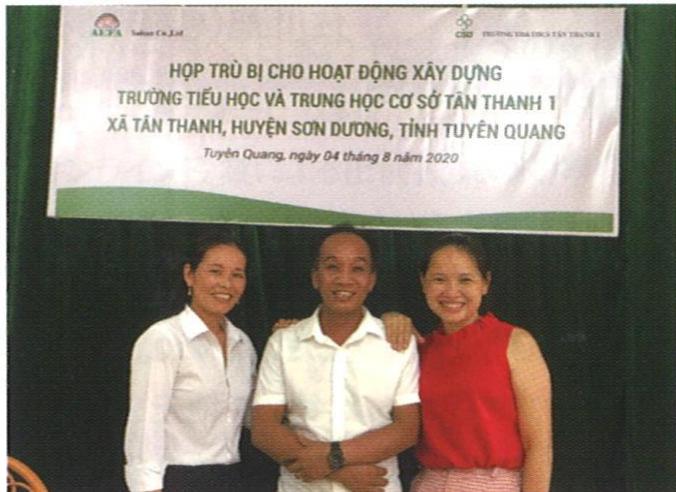
## CSD

ベトナム ハノイ市  
代表: アインさん  
Ms. Nguyen Diem Anh

Research & Communication Centre for Sustainable Development

アインさんは広告会社起業後、ソーシャルマーケティング分野の開拓を目指し、修士課程を取得。2010年、CSDを設立。会社の発展とNGO活動をバランスをもって両立させることで、社会に貢献すべく精力的に活動しています。

ベトナム北部少数民族の為の学校建設と、教員と生徒との間の積極的な対話により、子どもたちの学びを深める活動を実践しています。



左) 右端がアインさん

いま必要とされている支援を、必要としている人に届けるために。現地のパートナーとの間で長年培われてきた信頼関係の上にAEFAの活動は成り立っています。

## RTF

Raks Thai Foundation

タイ チェンマイ県  
チエンマイ事務所代表:  
ディレクさん  
Mr.Direk Khruajinli

1979年、国際NGO ケア・インターナショナルのタイ事務所として発足、1997年にタイ政府の認可を受け、ラックスタイ財団として設立されました。(本部・バンコク) チエンマイ事務所は、主に北部山岳少数民族居住地域における学校建設、持続可能な農業の為の活動を推進。スタッフは村に住み込み、民族の伝統的な文化や地域に伝わる知恵を尊重しながら、村人とともにコミュニティ強化を目指しています。



左) 中央がディレクさん

## Mr. Dayasiri Warmakulasooriya

コロンボ市

スリランカ コロンボ市

コロンボロータリークラブ

ダヤシリ氏は、1960年代に愛知県瀬戸市で陶磁器の製法を学び、帰国後、陶器会社・段ボール会社を経営。長くスリランカ日本語教育協会の会長を務め、コロンボロータリークラブの代表的なメンバーで、篤志家としても知られています。同氏は教育の重要さを常々実感していることから、AEFAの理念に賛同。“AEFAスリランカの代表”として、ロータリークラブをはじめ、同氏の熱意に感銘を受けた建築関係者など多くの人々と共に活動しています。



左) 前列右側がダヤシリさん

## ACD

Association for Community Development

ラオス サラワン県  
代表: ノンさん  
Dr.Boualaphet Chounthavong

医師でもあるノンさんは、首都の病院でインターン勤務していた当時、「病気になってしまふ前に、人々、特に子どもたちを守りたい」と考えるよう。少数民族が多く医療も脆弱な故郷サラワン県で、NGOの一員として活動する道を選択。絆余曲折を経て2013年、ラオス政府の登録NGOとしてACDを設立しました。理念は、「子供と若者のための平等な教育」。民族の伝統と知恵を活かし、子どもたちが自分らしく、また自立して生きていぐための活動を、子ども参加型で実施しています。



左) 右側がノンさん